

初期仏教に見る「ことば」の諸相 ④

初期仏教の思想

釈迦が人々に直接語りかけた「ことば」は、彼の入滅後、弟子たちによって記憶され、口伝の伝承によって保持された。そして經典製作者による思想的な変革を経て、彼の「ことば」は「仏教」という宗教に発展した。パーリ語原始仏典である三蔵の中でも特に重要視された「スートラ（経蔵）」は、直接垂示された教えを意味する「アーガマ（阿含経）」とよばれ、「ディーガ・ニカーヤ（長部經典）」、「マッジマ・ニカーヤ（中部經典）」、「サンユッタ・ニカーヤ（相应部經典）」、「アングウッタラ・ニカーヤ（増支部經典）」、「クッダカ・ニカーヤ（小部經典）」の五部に分類され整理されていった。

これらのパーリ語五部經典の中でも「小部經典」に属する『ダンマパダ（法句經）』や『スッタニパータ（経集）』は、数多の仏教典籍の中でも最古層に分類されているもので、初期仏教の思想が明瞭に描写されている。

釈迦が生まれた当時のインドは、さまざまな部族による都市国家が乱立し、社会的にはバラモン教の思想や伝統が社会規範として人々の生活に影響を及ぼしていた。釈迦自身も出家前はバラモンの思想を学び、その知識を得ていた。その後、彼は独自の修行と瞑想によって自らの思想を大成したが、人々に対する教化活動においては、既存の伝統や風習、そしてバラモンの言葉すらも一旦は認め、そのうえで、新たな思想的枠組みを提示するという姿勢を貫いていたようだ。たとえば、バラモン教の社会的規範として広まっていたヴァルナに基づく身分（カースト制度）を批判的に捉え、それにかわる新たな規範を示すというよりは、それらのバラモン教の思想を一旦承認しつつ、その上に新たな意味づけを行い、日常生活における倫理や道徳を説くという柔軟な姿勢が彼の言行から伺える。

『スッタニパータ』では、ヴェーダ祭祀に仕えるバラモン、バラドヴァージャとの対話の中で、ヴァルナに基づく身分と人間の貴賤について、釈迦は次のように述べている。

チャンダラ族の子で犬殺しのマータンガという人は、世に知られて令名の高い人であった。かれマータンガはまことに得がたい最上の名誉を得た。多くの王族やバラモンたちはかれのところに来て奉仕した。かれは神々の道、塵汚れを離れた大道を登って、欲情を離れて、ブラフマン（梵天）の世界に赴いた。（賤しい）生れも、かれがブラフマンの世界に生まれることを妨げなかった。

ヴェーダ読誦者の家に生まれ、ヴェーダの文句に親しむバラモンたちも、しばしば悪い行為を行っているのが見られる。そうすれば、現世においては非難せられ、来世においては悪いところに生まれる。（身分の高い）生れも、かれらが悪いところに生まれまた非難されるのを防ぐことはできない。

生れによって賤しい人となるのではない。生れによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる。（中村、1986: 35）

このように、バラモンであるバラドヴァージャに対して釈迦は、バラモンやチャンダラという低身分の概念や、死後の世界、バラモン教の救済観などを一旦は認め、バラモン教の言葉を用いて、バラモンの理解の地平に立って語りつつ、最終的には自らの新しい思想を展開し提示している。彼は、全ての人は等しく、生れではなく行為によってこそ貴い人ともなり、また賤しい人ともなりうるという道理を明快に説いた。これを聞いたバラドヴァージャは感銘を受け、釈迦に帰依したという。

釈迦はバラモン教を直接非難し、排斥するのではなく、バラモンが納得できるよう、その理解の土台の上に新たな思想を構築する話術を身に付けていた。そして、どのような境遇であれ、全ての人に通じる普遍的な真理を「法」として説いた。

また、釈迦は自らの臨終の間際に、側近の弟子アーナンダが嘆き悲しむ姿をみて次のように語った。

アーナンダよ。悲しむなかれ、嘆くなかれ。（中略）すべての愛するもの・好むものからも別れ、離れ、異なるに至るということをおよそ生じ、存在し、つくられ、破壊されるべきものであるのに、それが破壊しないように、ということが、どうしてありえようか。アーナンダよ。そのようなことわりは存在しない。（中村、1988: 461）

このように、全ては移ろいゆくもので何人も死は免れないとし、「無常」という法を直接的かつ厳粛に説いた。しかし、同じように死に関する説話であっても、自身の子供を亡くした母親に対しては、釈迦はそのような直接的な説き方を避けて、当事者による悟りを促すような問いかけを行っている。『スッタニパータ』と同じく「小部經典」に分類される尼僧たちの言行録『テーリーガーター』には、次のような説話が残っている。

ウッピリーという女性が、自身の幼い娘を亡くし、火葬場で我が子の名を叫び悲嘆に暮れていた際、釈迦は次のように語った。

母よ。そなたは、「ジーヴァーよ！」といて、林の中で泣き叫ぶ。ウッピリーよ。そなた自身を知れ。すべて同じジーヴァーという名の八万四千人の娘が、この火葬場で荼毘に付せられたが、それらのうちのだれを、そなたは悼むのか？（中村、2018: 19）

釈迦のこの言葉を聞き、発狂錯乱していたウッピリーは、釈迦の問いかけにより、どのような人であれ、全ての人は死を免れないという現実を悟り、同じような悲嘆は自分だけのものではないと気づく。そして次第に正気を取り戻し、自らの力で娘の死という現実に向き合い、釈迦に対し次のように語ったとされる。

ああ、あなたは、わが胸にささっている見難い矢を引き抜いてくださいました。あなたは、悲しみに打ちひしがれているわたしのために、娘の死の悲しみを除いてくださいました。いまや、そのわたしは、矢を抜き取られて、饑え（妄執）の無い者となり、円かな安らぎを得ました。わたしは、聖者ブッダと、真理の教えと、修行者の集いに帰依します。（中村、2018: 19）

釈迦の「ことば」によって我に返ったウッピリーは出家し、釈迦の弟子となった。「そなた自身を知れ」という釈迦の「ことば」によって、「自分のもの」であると錯覚していた我が子と、その主体である「我」を客観的に見つめ、非我の境地、つまり、「我あらざるものを我とみなすところから全ての苦悩が生じる」という釈迦の教えを、自らの力で悟って出家したのだろう。

このように、釈迦は同じ法を説く場合でも、相手の状況を考慮し、時にはストレートに、時には問いかけながら、応病与薬とも呼ぶう巧みな説法を行っていたようだ。原始仏典にみる釈迦の「ことば」には、覚者としての威厳とともに、銜いのない人柄が滲み出ている。そこには釈迦の教えの原風景がひろがっている。

[引用文献]

中村元訳『ブッダのことば スッタニパータ』岩波書店、1986年（第5刷）。

中村元『ゴータマ・ブッダ—釈尊の生涯—』春秋社、1988年（第10刷）。

中村元訳『尼僧の告白 テーリーガーター』岩波書店、2018年（第20刷）。